

90年前に存在したHIV その起源と感染拡大の謎に迫る

評者 中西真人

ヒトの病原ウイルスの中で、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）ほど集中的に研究されてきたものはないだろう。1981年6月5日に後天性免疫不全症候群（AIDS）によるカリニ肺炎が初めて報告されてから、HIVに関する論文は32年間で26.7万報も発表されている。インフルエンザウイルスに関する論文が95年間の累計で5.3万報、肝炎ウイルスが9.4万報、天然痘ウイルスを含むポックスウイルスに至っては1.5万報なのだから、その差は歴然としている。しかし、意外なことに、HIVが世界のどこで出現したのか、そして1981年の運命の日までにその感染がどのように広がったのか、実はあまりはっきりしていなかった。本書は、

7年にわたる研究成果を基に、HIVの起源と伝播の背景に迫った力作である。

本書の大きな特色は、1920年代にまで遡る膨大な資料（巻末には799もの参考文献が引用されている）の分析と、HIVの遺伝子変異に基づいた最新の分子進化学による推察を組み合わせた緻密で冷静な謎解きにある。アフリカでの臨床現場と大学での疫学研究で経験を積んだ著者の推理は見事で、HIVの先祖は1920年代初頭にカメルーン南部でチンパンジーからヒトに感染し、1930年代に現在のコンゴ民主共和国の首都キンシャサに持ち込まれて感染がゆるやかに拡大したという驚くべき結論が導かれている。HIVは新興病原体ではなく、既に100年近く前にヒトの社会に存在していたのだ。しかし、これだけではその後の爆発的な感染の拡大は説明がつかない。著者はさらに考証を積み重ねて、後半ではHIVが世界中に急速に拡大していった過程を明らかにしている。

“お医者さん”のイメージとして、白衣や聴診器と共に必ず上位にランクインするものに注射器がある。注射は、原則として医師以外が行うことができない医療行為であるが、その理由は「体内に入れた物質は二度と取り戻すことができない」という危険を伴う行為だからだ。1930年代から70年代のアフリカ中部では、眠り病や梅毒といった風土病を治療するための化学療法剤の注射を介して、C型肝炎ウイルス

(HCV) やHIVの感染が拡大していった。原虫による感染症を撲滅しようという医療関係者の熱意の一方で、当時はまだ血液を通じた感染が認識されていなかったため、注射器は簡単に洗っただけで多数の患者に使い回されていたのだ。

さらに、アフリカで働いている間にHIVに感染したハイチ人の1人が故郷に帰ったことで、感染拡大の第3ステージの幕が上がる。当時のハイチでは、血漿製剤を作るための売血が貧しい人々の生活を支えていたが、採血回数を増やせるように血液提供者の体に戻された血球成分がHIVに汚染されていたのだ。このように、HIVの急速な感染拡大の背景に存在した貧困や植民地支配による社会構造の変化といった社会問題の分析が、本書後半の重要な主題である。

第13章では初期のHIVとの闘いに大きな役割を果たしたジョナサン・マン博士についての言及がある。著者は、彼の国際的貢献を認めつつも、初歩的で効果的な感染予防の原則を無視したためにアフリカで数百万人の感染を防げなかった責任を厳しく指摘している。冷静な視点で貫かれた本書の中で、著者の熱い想いが垣間見える一節だ。

本書が明らかにした歴史的事実は、決して過去の話ではない。再生医療や遺伝子治療といった先端医療に関わる者は、患者の体内に入れた細胞や遺伝子は二度と完全には取り除くことができないことを、常に心しておくべきである。拙速を厳に戒め、安全性に対する慎重な姿勢を忘れずに確実な一歩を進めなくてはと、自戒をこめて思う毎日である。

（なかにし・まひと：産業技術総合研究所）

エイズの起源

ジャック・ペパン 著 山本太郎 訳

四六判 400ページ みずが書房 4200円（税込）

